

人はたがやす 水牛はたがやす 稲は音もなく育つ

廃油ボール、沖縄東海岸を襲う 2

生きるための芸術 6

与太浜造船から佐伯造船へ 山元清多 15

フィリピン活動家のみた日本の現状 21

フィリピン農民の生活 26

# 廃油ボール、沖縄東海岸を襲う

## ヤマトの新聞はなぜ沈黙をまもるのか

きのう、ヤマトの新聞は光州コミュニオンとその弾圧について、沈黙をまもった。おなじ新聞が、きょう、沖縄東海岸にひろがりつつある、復帰後最大といわれる廃油汚染について、かたく口をつぐんでいる。

報道されないものは、存在しない。そう信じこまされている若者たちが、あこがれのマックロネシアにやってくる。飛行機をおり、バスにのって、たとえば中城湾のホワイト・ビーチをおとすれたとしようか。おめあての海岸には、波打ちぎわにそって、二メートルほどのばばで、アズキ大、コブシ大の廃油ボールの帯がはしり、うつくしい砂地に踏みこ

むと、足のうらに、溶けたコールタールがべつたりとくっつく。

「本土の新聞には、こんなこと、なにも書いてなかったじゃねえか」

と、腹をたてるやつはまだマシなほうだ。ほとんどの連中は、

「チエツ、ついてねえな」

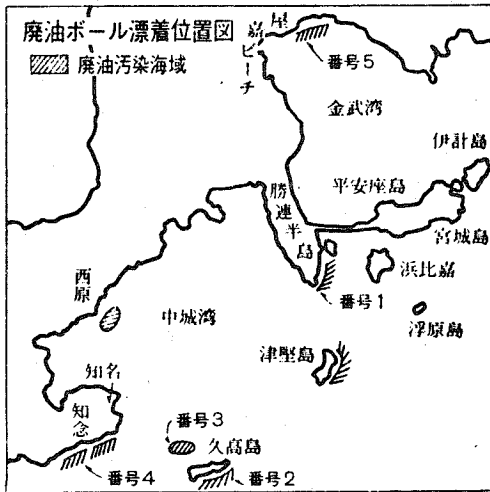
そうなげくだけで、こんどは西海岸に足をのばし、そこが無事だったら、あとのことはすべて忘れて、たちまち、ハッピーなマックロネシア人になってしまふのだろう。報道されないものは、存在しない。存在させたくないものは、報道しなければいい。

七月二十二日。金武町の屋嘉ビーチに、大量の廃油ボールがながれついた。

それから数日間、廃油汚染は金武湾から中城湾一帯を中心に、またたくまに、東海岸全域にひろがった。この地図は、沖縄タイムスの七月二十四日号にのつたもの。汚染発見後、琉球新報や沖縄タイムスは、毎日、大見だしの関連記事をのせつづけている。新聞がおこっている。沖縄の新聞は、まだおこることが出来る。それにくらべると、朝毎読をはじめとする中央紙の沈黙が、異様な、じつにみじめなものに感じられる。

タンカーや貨物船からすてられた廃油が、かたまりになって、海上をただよう。これが廃油ボールだ。

沖縄本島の東方海上が、中近東やインドネシアと本土のCTSをむすぶ石油の道になっていて、大型・中型タンカーが、一時間に一隻の割合でとおりすぎる。これらのタンカーが、大量の廃油を不法投棄する。どの般がすてたのかさえ、わからない。東風が吹くと、それが浜に吹きよせられ、白い砂浜をコールトールの沼にかえてしまう。



そればかりではない。廃油は漁網にへばりつき、サンゴ礁を破壊して、海に生きる人たちの暮しをいためつける。汚染が発見されて三日目、七月二十五日の調査で、中城湾・金武湾の二十カ所の定置網のうち、半数にちか九つが、はやくも廃油ボールにやられていることがわかった。「神々の島」として知られる久高島でも、砂浜や岩礁が油づけになった。漁民は語る。

——島のタール汚染は、五十二年の夏ごろからはじまってるけど、こんな量ははじめて

だ。ひどすぎる。このあたりは貝類もおおかつたが、いまでは見たこともない。死の海浜と化さないうちに、なんとかしなくては。

住民たちはハシをもち、小粒の廃油ボールを、一つずつ、ていねいにひろい、バケツやダンボールの箱にあつめる。太陽熱のために、ほとんどがアメ状に溶けて、べつとりと砂にくっつき、手がつけられない。しかし、廃油ボールにはどんな化学処理剤も効果がない。何日も、何十日もかけて、こうしてひろいあつめたものを焼却するしか、方法がないのだ。

金武湾や中城湾には、すでに巨大なCTS（石油備蓄基地）や石油精製工場が設置され、タンカーの出入りもおおい。ふだんから油もれ事故が頻発し、それにくわえての、今回の廃油汚染である。沖縄の海を油づけにしても、石油国家備蓄の手はゆるめない。新聞は沈黙をまもることによって、この国家方針に賛成する。きのう光州を黙殺し、きょう沖縄に口をとぎした新聞は、あすはなんについて沈黙するつもりなのか。

「金武湾を守る会」の人びとも、汚染状況の調査をつづけている。

かれらが国策をこぼみ、三菱のカネをはねのけて、生活の自立を実現する——その計画の大切な柱の一つが、モズクの養殖である。

廃油ボールが押しよれば、モズクはひとたまりもない。アブラの力に対抗して、せっかきくきずかれつつある生活の根が、またしてもアブラの暴力によって、うちくだかれてしまふ。どんなに努力をかきかねても、そのたびに、あらたな災厄がおそいかかる。その災厄をもたらすのは、自然ではなく、このたびもヤマトの支配権力なのである。

——廃油ボールの広域汚染を問題にした金武湾を守る会の安里清信世話人らは二十四日午後、屋敷名港付近と同港のすぐ向いにある蔽地島の周囲を調査した。その結果、同島の東側付近には、砂浜がかけられるほどに廃油ボールがひろがり、頭大の大きなボールがゴロゴロしていたという。「琉球新報」七月二十五日号。

この蔽地島に洞窟があり、人間のおへんぐらの背丈しかない、毛むくじやらの小人が住んでいる。昔、クワディーサーの木の実が、海藻にのって、蔽地の浜にながれついた。毛人がそれをひろって、浜に埋めた。それが「ヤキナ・クワディーサー」のはじまりである。

毛人はいまま洞窟に住んでいる。神の気をおびた女性だけが、そのすがたを見ることができるといわれる。

地つきの民衆的な想像力のひろがりのなかで、蔽地島は屋敷名や金武湾の生命のみならず、この島に、おなじ浜に、生命の木の実ではなく、死の廃油ボールがながれついた。これは、金武湾の人びとが自分たちの生に強烈な光をあてて、それをかがやかせざる伝統的なやりかたが、あたらしい現実のなかで、時代おくれのものになってしまったことの証憑なのだろうか。

七月二十五日。蔽地島につづいて、津堅島と浜比嘉島の調査。廃油ボール発見。

だが、翌二十六日には、恒例の「屋敷名大綱引き」が、屋敷名大通りに三千人の人びとをあつめて、盛大におこなわれた。この熱気にみちた催しは、二百年以上もまえからおこなわれ、一時とだえていたのを、四年まえ、反CTS闘争のなかで、「金武湾を守る会」の人びとがよみがえらせたのである。

そして八月三日には、屋敷名のとなりの照間ビーチで、ハーリー鐘をにぎやかに打ちながらの舟競争——ハーリー祭りがおこなわ

れた。別掲の「趣意書」にもあるとおり、この祭りは、金武湾の漁民たちの申し入れにはじまるもので、海に生きる者が土に生きる者、町ではたらく者と、ともにたたかい、ともにたのしむ、そうした状態を、しっかりと実現しようとしてきた。それは、金武湾反CTS闘争の中心に、漁民たちが積極的にくわわってきたことをしめす、画期的な祭りになった。

——三菱もこまってるだろう。こうアラブの被害がひろがると、九月にやるはずの第二次オイル入りが、やりにくくなってくる。こつちがたのしそくに生きてみせる。そいつがいちばん、敵の気をめいらせるんだ。

くるしくはないはずがない。津堅や浜比嘉の浜も、ピカピカの黒ペンキを塗ったみたいになつていった。モズクだけではなく、アワビの養殖もあぶない。定置網の被害だけではなく、イカその他の一本釣りまでダメになつた。犯人のタンカーを特定できないので、補償問題も、おそらく、そうかんたんにはかたづけられないだろう。

そして、くるしみがふえると、たのしみがふえる。たのしみをふやす。くるしみに押しつぶされるのではなく、それに対抗しようた

のしみをつくりだす。後手にまわるのではなく、先手をとる。廃油汚染のまっただなかにおける、屋敷名の大綱引きや金武湾のハーリー祭りは、いぜんとして、それがかれらのたかいかたの原則でありつづけているということ、はつきりしめしていた。

光州でおこつたことをひろめたのは、大新聞ではなく、さまざまな運動体がだすビラやパンフレットだつた。水牛通信も、手わたされたビラのいくつかを印刷し、号外として読者に手わたした。新聞の沈黙は糾弾されるべきである。だが、それはそれとして、大新聞の商売のネタにされるよりも、必要によつて、

つぎつぎに手わたされていくのにふさわしい情報がある。そんな気がしないでもない。新聞が沈黙をまもる領域は、これからますますふえていくだろう。後手をとるのではなく、先手をとるたたかいかたを、あみださなくてはならない。

民の不屈の闘志を披れきしよう。住民も労働者もその戦列に加わり、海をとりもどす闘いの決意をみなぎらせよう。

\*

以上の主旨で催される第一回金武湾ハーリーは、具志川漁民・照間漁民たちからの金武湾を守る会への申し入れによつて、実施の運びとなりました。そして今後、この行事は毎年けいぞくして催し、金武湾内漁民と住民・地域労働者の連帯と交流の場とし、海をとりもどし、その浄化と再生への決意の場にしたいと考えます。心ある多くの漁民・住民・労働者の結果を呼びかけます。

一九八〇年六月十六日

金武湾を守る会  
金武湾内漁民有志

## 第一回金武湾ハーリー呼びかけ趣意書

海の悲痛な叫びが聞こえる。魚や海藻やサンゴのうめき声が聞こえる。農地・宅地の無神経なまでのずさんな造成による赤土の海への流入。石油基地（CTS）立地のための埋立と、海中道路建設による潮流のせきとめ、CTSとタンカーによる油流出事故と意図的なたれ流し、営利優先の企業の悪質な工場廃液のたれ流し、そして、便利さにならされた私たち住民による洗剤のたれ流し……。今やそれらの複合汚染によつて、海はよごされ、死に傾いている。

金武湾はかつて豊かな海であつた。人々は海をしたい、いこいの場とした。海藻を

採り、貝をあさり、魚をつり、食卓をにぎわし、生活をうるおした。漁民は朝な夕なに海の幸にめぐまれ、活気にみちみちていた。また、海は浜下りで女の身を浄める祈りの場であり、沖縄の伝統文化の母であつた。子どもたちは海を友とし、海水浴を楽しんだ。海——それは存在の原点だ！

その海をみんなの力でとりもどさなくてはならない。海をよみがえらせ、再び豊かな海につくりかえなければならぬ。そのため、みんなの知恵と力をひとつに結集しよう。

その第一歩、金武湾ハーリーに集い、漁

# 生きるための芸術

お客がへやにはいつてくると、外はげいしい雨になった。「タイの農民は、雨をもってくるのはよい客だ」と、年長のお客がいった。日本では雨ふって地かたまるという。雨にもつ感じはおなじではないが、人々のよい関係をつくるきざしにはちがいない。

わかい人はスタム・セーンプラトゥムさんという。一九七二年にチュラロンコン大学法学部にはいり、一九七六年八月にNSCT(タイ全国学生センター)の書記長になった。その年の十月六日、タマサート大学をとりかこんだ右翼のひきおこした「血の水曜日」をくいとめようと、時のセニ首相にあいにいったところを逮捕され、二年間獄中にあつた。「もし投獄されていなくなつたら、どのくらい社会のためにはたらくことができたかとおもうと、まったく残念だ」と、あとでいつている。釈放されてから、「私にとつての10・6」という本をかいた。本人はけんそんしているが、よい本で、みんながあらそつてよんだ。

年長の人はトンバイ・トンパウ先生。スタムさんをはじめとする「バンコク十八人」の弁護団の団長として、全国人民の世論をうごかし、また世界をまわつて人権問題としてこれをうつつたえ、連帯する

運動をつくつた。日本にもそのために立ちよつたことがある。クリアンサク内閣は、この国内と国外の世論の圧力にまけて、議会で特別立法をだし、十八人全員が釈放された。

トンバイ先生は、自分も八年間政治犯として獄中ですごしたことがあり、ジット・プミサクといつしよに獄中闘争を組織した経験もある。いまはバンコクで法律事務所をひらいていて、日本企業がおこす問題なども、労働者の側になつて弁護をひきうけている。最近社会の不正をあげた新聞記者が次々に暗殺されているので、報道の自由をまもるために全国ジャーナリスト協会を組織した。

トンバイ先生は、このあつくるしいへやのなかで、フランネルの長袖シャツをきて、毛のくつ下まではいっている。メガネをはずしていじりまわし、とうとうこわしてしまつた。

スタムさんはビールをのんで、おちつきはらつていっている。日本でだしたタイの「生きるための歌」のカセットをききながら、いつしよに一節をうたう。

二人とも、まねできないような笑顔をもっている。どんな質問にでも、できるだけこまかくこたえる。

今度の日本への旅は、スタムさんたちが釈放されたので、各国の支援組織をまわつて報告し、感謝するのが目的だつた。毎日たくさんの人とあい、おなじような質問にこたえてきた。

「水牛」にはなしてくれたことは、すこしちがう面のことだ。「生きるための芸術」から、あたらしい知識人のスタイルにいたる。

まず、スタムさんがはなしはじめた。トンバイ先生は、ときどきメモをとつている。

## スタムさんのはなし

「私にとつての10・6」という本は、第一刷(五千部)が全部売れてなくなりそうなときに、警視總監の発売禁止処分にあい、それから学生の手から手に、地下で売るといふ感じで、第二刷が五千、第三刷が五千で計一万五千部をだいたい売りつくしました。

印刷したのはふつうの印刷所です。他のふつうの本も印刷していますが、発売禁止になるような本でも理解してくれました。

本にする前に雑誌に連載していたんです。10・6のことについては、いろいろな新聞や雑誌でいつくされていっているので、印刷所はそれに関するものを印刷するのにたいした抵抗を感じてはいなくなつたようです。特に友人とか理解者というわけではないけれど、迷惑がつてやつた様子でもなかつた。私自身が交渉したわけではありませんけれど……。それに連載で雑誌にでているときには、政府のほうでまったく問題にしなかつた。一冊の本にまともなところ、急に、これはタイの治安を乱す、といひだして発売禁止にしたのです。けれども発売禁止になつたあとでも、売ることや印刷することには

特に問題はありませんでした。一刷目は十パーセント、二刷目は十五パーセント、三刷目は二十パーセントの印税をちゃんと持つてきました。

一本の内容はすでにいろいろなところできいわれつくして、みんなの知つているところだし、この本だけが特別とりあげられて発売禁止になるのはおかしいのですけれども、私自身がその中心人物でそれを体験してきた人間で、そういう人自身が書いたものの影響の大きさをかんがえてとられた処置ではないかと思ひます。

あの本は、私が結婚したとき、タイでは結婚式や葬式のときに本を配るといふ習慣があるので、自分の結婚式に配る本にしたくて、それに間にあわせるために一週間ぐらいでいそいで書いたものなので、自分では出来がよいと思つています。

発売禁止になつたのはクリアンサク内閣のときです。

発売禁止処分を出した警視總監は今もかわつていませんから出版事情もおなじです。タイの場合、そのときの警視總監とか、担当者である警察官の気分次第で禁止したり、気がつかずに許可したりするので、しつかりした基準によつて禁止するといふふうな感じではありません。

それに、ISOC(治安作戦司令部)などの方針で、ある程度過激なものもでるところまで待つていて、それから、一番過激なものを問題にとりあげて、ほかも全部弾圧するといふ、そういう作戦をつかうということもあります。

「生きるための歌」の場合でも、ククリットが首相だつた時代にも禁止だつたんです。けれども、だれもそれをきかず、公然と流してい

たし、あちこちでうたっていました。その後10・6のあとは完全にできなくなりまして。でも最近では各大学の学生バンドがほとんど復活していて、それぞれ自分たちのつくった歌をうたっています。森でつくられた歌が都市へでてきて、それを学生たちが、都市の状況にあわせて歌詞をかえてうたっているものもかなりあります。

学生バンドが森へ入ってからの歌のスタイルは、それまでの経験からまなんで、農民たちや一般の人たちにもっとわかりやすいように、作曲でも内容でもスタイルでも、すべての面でかわってきまして。

タイの東北部、北部、南部のそれぞれの民謡をとりいれていくことをまずやりました。そういうものを編曲し、それに自分たちの歌詞をつけていく。そこでいちばん大事なことは、歌詞でつかうことばがわかりやすいことです。私たち学生はとくむずかしいことばをつかう傾向があるので、それをわかりやすいことばにしていくことにいちばん重きをおいてかんがえました。

その後、「生きるための歌」の新しいのをタイから入手していらつしやいますか？ また学生バンドがかなり活発に動いてきていますよ。最近ではマヒドン大学の学生バンドがテレビにできました。国王誕生日かなにかの日でしたけどね。当日放映されるまで、政府側にはわからなかつたので、間にあわなかつたのだと思うけれど、みんなはひじょうによるこんできました。

以前の学生バンドは、髪を長くしてヒッピースタイルでやっていたかもしれませんが、そういうかたちでいくと、農民たちの生活とは異和

一九七三年以後に「生きるための歌」という名前がつけましたが、それは以前のジット・プミサクの歌や今の森の歌や、いろいろなものをつくめた、人民のための歌ぜんぶをさします。

10・6のあと、すべての学生組織と同時に、政治劇をやっていた、学生が主だったグループも全部解散させられたのですが、学生たちは、それぞれの大学で組織をもちたいという闘争をおこなったので、学生組織ができあがってきたと同時に、音楽と演劇のグループもまたできてきています。以前のように大きいものではないし、全部がつながって連帯しているというのでもなく、それぞれの大学で、というかたちです。

闘争や問題があるときには、それを劇にして上演します。たとえば、米代が値上りするというようなことを劇にしていく、それから農民がどんな生活をしているか、どのように苦しんでいるかを劇にして見せていく。最近では、インドシナ問題を劇にする、カンボジア国民がどのような辛酸をなめているかを劇にする、というように、そのときどきの政治情勢や国際情勢を劇にしてみせてあるくかたちにしていきます。

そのほかに、おどりやモダンダンスのスタイルもとりいれて、音楽劇のような形式で、労働者の問題をやり、農民の問題もやります。私といっしょに10・6に逮捕された友人で、あのとときのクレーターをおこすきっかけをつくった劇をつくった人が釈放されて、また演劇活動をやっています。

場所はそれぞれの大学の講堂をつかいます。切符は大学の外で売

感があつてまったくうけいられないので、今の学生バンドはすっかりあらためて、髪は切って、ワイシャツとズボンのきちんとしたスタイルでやるようになりました。

釈放されたあとに、日本で「生きるための歌」が日本語になって、カセットテープもあるというはなしをききました。そういうバンドがあるのなら、タイに来て各大学をまわってもらいたいというはなしもありました。二年ほど前です。

私は音楽に関して専門家ではないので、そんなにくわしくはいえませんが、私の考えでは、タイの民謡や民俗音楽は、一般の人民、おもに農民たちの生活の歌であり、生活のリズムのなかから、労働のなかからうまれてきた音楽ですから、ほとんどの場合リズムとか音楽のかたちはたいへんやさしく、生活にあつたものになっていますが、タイの伝統音楽といわれるものは、王宮で発達してきたものですから、そもそも出発点となつた階級がちがいます。王侯貴族の屋敷や宮廷でかなでられた音楽ですから、民俗音楽とくらべればむずかしくなっています。

日本の場合もそのような違いがあるのでしようか。日本の封建階級からうまれてきた音楽、現在の中産階級の音楽、それから日本各地の民謡、古くから伝わる民衆の音楽、それぞれの違いはどんなものでしょうか。

私たちがもっている「生きるための歌」のようなものが、日本にもあるのでしょうか。あるとすれば、どういったもので、どういった展開をしてきているのでしょうか。

つて、学生以外の人でもだれでも来てみられる。切符の売り上げで、次の活動の準備をします。

ちがう大学の楽団や演劇グループがいつしよにやるんです。予告は出演グループの名前だけで、それ以上の情報はありません。

人はたくさんあつまりますよ。いつも二、三千人あつまって、講堂がいっぱいになります。

弾圧がないとはいえません。去年、ラムカムヘーン大学の楽団と演劇グループが東北タイのマハーサーラカム県に出かけていったとき、その地方の右翼におそわれて、何人もけがをするというようなことがありました。そのときは警察に訴えて、めずらしいことに警察が右翼を逮捕し、それ以来そのようなことはおこっていませんが、危険がないとはいえない。しかし学生たちがそれぞれ活動をやめたりはしません。

劇には台本があつて、それをよく練習したうえで上演しています。まったくの即興劇ではありません。政治劇を民衆の前でやる伝統があるのかという質問ですが、トンバイ先生が学生だった一九五〇年以前から、そういった政治劇、「生きるための歌」といういいかたをかりれば「生きるための演劇」という伝統はありました。

### トンバイ先生のはなし

今の学生のやっていることと昔とでは、ちがいはもちろんあります。その時代の最初の学生のたたかいは、いろいろな制限に対して自分たちの権利を守るための個人的なたたかいはじまりました。

一九四九年のクレーターのとき、タマサート大学は閉鎖されて、

私たちはまなぶ場所を失ってしまったので、そのときは学問をする権利をうばわれたことに対して学園を返せ、ということでした。講演をするとか集会をするとか、ナイフで自分たちの腕を切り、血をだして、それだけやる気があるのだという真剣さをしました。そのときが学生運動のはじまりです。

一九五〇年から五二年までは、タイは朝鮮戦争に兵をおくったので、学生たちはそれに反対して平和運動をやりました。そのときは学生だけでなく、弁護士、先生、そのほか一般の人たちも参加する平和運動になりました。

そのときにも学生たちは政治劇をやりました。自分の国の独裁者を直接に劇にすることのできない政治状況であったために、朝鮮やマレーシア、インドネシアのような外国の問題をもってきて、たとえば「ピット・ペンデン」(自分の国はまちがっている)というタイトルで、自分たちの国がまちがっているということを、私たちはうたえてみたのです。

その当時の学生たちの演劇の脚本、台本を書いていた人たちは、現在では有名な作家になっています。たとえばスワット・ウォラディロクさんなど、みな詩人であり作家です。タウィー・ウォーンという人はスワットさんの弟さんで、やはり詩人でもあり作家でもあります。ナイ・ピー(妖怪氏)、ブルアン・ワンナシーという共産党にはいった人、そういう人たちがやっただけです。当時一つの場合は面がおわるとカーテンをしめ、その前で彼らのかいた詩の朗読をやり、それからまた次の場がはじまるという構成にしました。彼らはみな学生だったので、そのようなことをやった結果、みん

でとりいれられたことよって、中央のナイトクラブでも、芸術庁の劇場でも、うたわれ、きかれるというチャンスを得たわけです。

それ以前のタイの音楽にはもう一種類ありました。それは町の音楽、つまり中流階級の音楽ということもできます。「くさった水の文学」といういいかたがありますが、これは「くさった水の音楽」といつてもいいんです。「おまえが死んだらわたしは一分も生きていられない」というような、どうしようもない陳腐なもので、セクシーなだけの、内容のない歌なんです。そういうものななかには日本の「サヨナラ」や「チョウチョウさん」、アメリカの歌をタイ語になおしたり、すこし編曲したものがたくさんあります。

「生きるための歌」がだんだんはやりだしてきたころ「人民の声」放送が一般にきかれるようになり、そこでもその歌をやったので、それもひろまる原因になりました。そして、民謡を主題にした「生きるための歌」が、ナイトクラブ、ラジオ、テレビ、劇場などに登場してきた。それは、タイの民衆の歌を一段階前進させたという意味をもってきます。「生きるための歌」が民謡をひろめていったわけですから、たとえば「人と水牛」はラジオやテレビで放送されたし、爆発的な人気をもっていたんです。タイの政府はおそれおのき、治安を乱すとか、かれらの利益をおかすものだという理由で禁止しました。それはまだ10・6以前のことでした。10・6以後はいつさいの「生きるための歌」が弾圧されてきたので、ほんとうはもつともつとひろまるはずのところをおさえられ、今ではふつうにあるいていくことはできません。

な除籍処分や退学処分をうけました。

スワットさんはその後シナリオ・ライターになって、タイのひとがたいへん好んで読み、好んでみるものをたくさん書きました。かならずしも社会主義リアリズムとはかぎらず、中国のものなどいろいろなものを取り入れてやっています。

その当時、それぞれの地方で民衆演劇が別々にあり、中央タイではリケー、南タイではノーラというふうには、それぞれの土地でちがう名でよばれていました。音楽でも地方ごとにそれぞれの特徴ある調子や曲をもっていました。それらは民衆の生活を反映してできたものです。中央の王宮からはじまったタイの伝統劇や音楽は、王宮を中心とした貴族たちの生活にあつたもので、ほとんどの場合、男女間の恋をあつかつたものばかりです。民衆の歌のなかにも男女の関係をうたつたものももちろんあります。たとえばブレン・チョイは男女のかけあいです。しかし、それらはやはり民衆の生活に密着したものです。

「カラワン」を中心とした楽団が歌をつくり、演奏してまわつたので、タイの伝統的な音楽界とかなりな衝突・反響をよびおこしました。彼らは各地方の民謡のなかにあつた恋の歌などを、まったく別の歌詞につくりかえていったのです。

「生きるための歌」はカセットテープを使い、テレビにもラジオにもでて、民衆の歌を一カ所だけでなく、全国津々浦々にまでひろめていきました。それまで民謡は各地方でうたわれていただけで、中央に伝わってくることはなかったわけです。それが、そういうかたち

私の経験をすこしおはなしましょう。

タイ東北にあるマハーサーラカム県は私がうまれたところですが、教員養成大学の学生バンド「クルーチョン(先生)」、「トクラー(苗)」といつしよに、一九七六年、10・6の前ですが、そこへ行きました。学生のなかではなく、農民や一般の市民すべてを対象に、お寺で演奏会をひらく予定でした。

その直前になって、県知事、警察、郡長などが、この人たちは共産主義者で、この県にやってくるおまえたち民衆をだまそうとしているのだから参加してはならない、と宣伝してまわり、前日には各学校の先生たちに命令をだして、生徒たちがききにいくのを禁じました。

この演奏会に、私たちはひとり三バツずつお金をとりました。タイの農民たちは、ごぞんじのように貧しくお金をだすのはたいへんなのですが、私たちはそれをもって帰ろうとおもつたのではなくて、かりたお寺の本堂をたてる資金として集めたのです。

当日になると、県側、警察側からのお達しにもかかわらず、生徒たちはたくさん集まってきました。

はじめに私が立つて講演しました。「生きるための歌」というのはいったい何かをみんなにわかしてもらうために、その歴史と意味、それに対して、さきほどいったような「くさった水の歌」がどんな内容で、「生きるための歌」がどういうふうには民衆の生活をうたっているのかということをはなしました。そして「生きるための歌」をつくつた人たちは、たとえば「人と水牛」の場合、コンケン県の農民の息子がつくつたのであり、たとえば「めしを食う」をつく

つたジット・プミサクもやはり王宮の封建階級からできた人ではない。みんな人民の子であり、これを演奏する学生も人民の子であり、いま、あなたたち人民のところにそれをもってうたいにもどってきたのです。このような話をしました。

それから「人と水牛」から演奏をはじめました。この歌がどういう意味をもっている、どういう農民の生活をうたっているか、ということをはなしてから演奏にはいったのですが、終ると、きいている人たちの拍手がなりやみませんでした。

つぎにジット・プミサクの「めしを食う」をやりました。それもやはりまずどういう意味があるのかを説明しました。そのあとのすべての歌についても、まず意味を伝えてから演奏していったのですが、どの曲もどの曲も拍手がなりやまず、子どもから年寄まで、立って帰る人がひとりもいなくて、今晩中ずつと演奏してほしい、どうか帰れないでくれ、とみんなにいわれました。

演奏会は二晩続きでしたが、二晩目もまったく同じでした。各字校の生徒たちは禁じられていたにもかかわらず、みんなききにやってきました。警察は、私たちが右翼にねらわれる危険性があったにもかかわらず警備に来ようとはしませんでした。農民たちが、若い人をまわりにおいて会場の外をあかるくしてみたり、私たちの安全を守ってくれました。演奏会は朝の五時まで続き、学生たちは次の日タマサートで演奏会がありましたので、五時によく帰ることができました。

音楽と音楽のあいだにはちよつとしたみじかい劇をいろいろやりました。たとえば、農民はどうしてこんなに貧しいのか、それはあ

のが私たちの国なのです。

たとえば、弁護士としてなにかひとつの事件を弁護する。そのことひとつをとりあげてみても、それに関する法律だけを知っていればできる、というようなことは、タイでは不可能です。ラジオ、テレビ、小説、政治演劇、歌などすべての手段をつかって訴えなければなりません。生活においても、だまっけて食うことはできないので、自分たちでアヒルを飼ったり、トリを飼ったり、野菜をつくったりということまでふくめて全部のことをしなければならぬのです。私がラートヤウの監獄にいたときには、肥桶をかついで野菜にこやしをやらなければならぬとしました。

ジット・プミサクとかスタムくんといった現代のタイのあたりしい知識人は、タイの現在の状況に処していくためには、歌もうたう詩もつくる、劇もかくし自分でもやる、そういつたすべてをやつていかなければならない。それは必要からおこるのです。

タイのマスコミ、ラジオやテレビは政府・軍がぎっています。タイのラジオ放送局は二百あるんですが、そこで流している音楽は日本とおなじで、日本からきたさまざまな音楽、テレビだと香港、台湾からきたアクションもの、ブルース・リーの活劇などにみちあふれています。

バンコクという街は、トルコ風呂、ナイトクラブ、キャバレーが氾濫している街で、マスコミが流す歌も劇もみんな、そういつた方向をおすすめるようなものばかりです。したがって強姦事件などはものすごく多い。

なたたち農民の祖先が怠慢だったからこうなったわけではない。もしも水があり、灌漑設備があり、みんなが協力してやれば、もつとゆたかで幸福な生活をつくることのできるのだ、というような劇です。内容は、ききにきている農民たちの実際の生活であり、使うことばは、彼らがきいてすぐわかることばです。わからないようなことばはいっさいなしです。歌も芝居も、みに来ていた農民たちがすぐとけこめるものでした。

終つてから私たちは集まってきた生徒たちや村の人たちといっしょに歌をうたったりしました。それまでまったくうたつたことのない「生きるための歌」をそういうかたちでみんなはおぼえていったわけです。

日本の政治状況とタイの政治状況とはまったくちがいます。日本はひじょうに発達した資本主義国で、民主主義も発達している。タイの場合は、きのうかわつた政府がまたすぐかわつてしまうような、不安定な政治であり、そのたびに人民の権利がなくなったり、とりもどしたり……といった状況です。そういう社会にいる私たちは、日本やアメリカのように、専門化されたかたちだけでやるわけにはいけません。ジット・プミサクにしろ私にしろ、脚本も詩も学術論文も書きます。私の場合は、弁護士であり、新聞記者もやり、短編も書く。歌をうたつたことはないけれど歌をつくることはある。つまり書くことはなんでもやる。さきほど話にでたスワットさんは本も書くし闘士でもある。タウィーブさんは詩人でありながらやはり闘士である。そういうふうにするすべての面をやらなければならない

現在では、さきほどいって「ナムナウ」つまりくさつた水の文学、くさつた水の歌、くさつた水の劇が、内容も陳腐ならば表現もまったくおもしろくなくて、いつまでたっても月並なメロデーでくだらないことばかりうたっているわけです。農民たちはもつとからそういつたものには興味がないんですが、それだけでなく都市の中産階級でさえ、もうあきあきしています。しかし、彼らはえらぶことができず、それしかきくことができず、上から制限されているんですからね。もし彼らにえらぶチャンスがあれば、こんなものを好みはしないと私は確信をもっています。「田舎の先生」という映画がちよつと前にありましたが、あの映画をどれだけたくさんの人たちがよろこんで観にいったか。映画をつくつたところはたいへんな金額をもうけました。政府側はこの映画をひじょうに危険視し、撮影したグループは脅迫されたり、いろいろと危険なめにあっています。

最後に、この「水牛」という雑誌について質問させていただきます。千五百部刷つて本屋で一般に売らないとかがいきましたが、そういうかたちで費用の採算がとれるのでしょうか。

タイの学生たちもこういうかたちで出していきたいと思つているわけです。各大学や、合同でも出しているものはあります。現在の政治状況について、学生たちのたたかひについてとか、そのほかの進歩的な、つまり民主的な文化状況、美術や文学に関するニュース、情報をのせています。しかし予算はひじょうにすくなく、毎月きちんと出せないの、どうしたらなんとかまかなえるのか知りたい

のです。タイの場合、私たちのグループの印刷所というようなものはないんです。印刷所はみんな資本家で、その本が危険だろうが売ればやります。そうでなければやらないわけです。それで、こういうものを出している方法をちよつとききかかったのです。

私たちからみると、日本のほうが私たちより民主主義がよほどすすんでいて、出版の自由がある。タイの場合だと「水牛」のような内容のものを出していけば、かならず資本家側の反論がでてきて結局つぶされてしまうという状況があつて、しばしば、雑誌やちよきナミニコミ誌は発売禁止の処分をうけます。

タイには反共法が今だにありますし、そのほか革命団布告とか内務省通達とかいろいろなかたちで制限があり、すべての面にわたつてむずかしい状況です。そのうえ内務大臣の「この本はタイの治安を乱す本である」というひと声で発売禁止にすることが出来ます。英文AMPもずっとタイにはいっていましたが、何度もそういう目にあつていきますし、アメリカからくる資料でもそうです。

しかし、私はタイの人民が勇敢であることをほめたいと思います。ジット・プミサクの本も何度発売禁止になつてもまた出てくる。これはダメそうだとすると、今度は出版元や印刷所の名前をいっさい印刷しないで出す。けつしてひるまない。ひじょうに危険なものを出すときには、名前もユレイ名前、会社もユレイ会社、場所もユレイ、そこに行つてもなにもない、雑誌の名前もユレイだから一冊だしたらあとと出ない、そういうかたちで出します。次にはまた別のところへ行つて出す。

日本は資本家から制限されるという自由の制限はあつても、私たちのように資本家階級と政府支配階級との二重の弾圧、抑圧をうけることはないでしょう。

日本では共産党は合法ですが、タイでは非合法です。反共法があるから、こいつは共産主義者だといつて殺された場合はまったく犬死で、もうすくいようがない、それでおしまいです。そういう状況は日本にはないでしょう。

たとえばジット・プミサクも、生きていければタイ国民にとつてまざまな意味で役立つ人だつたのに、彼はただ殺されてしまった。なんの意味もなく殺されてしまつて、まったく放置されたままなのです。

日本に来てたいへんうれしかったのは、日本のなかで私たちのタイのほんとうのころや、ほんとうのタイ人のたたかいを理解してくれるたくさんの人たちにおあいできたことです。私たちがいいと思つているまざまな本が訳され「生きるための歌」が日本語になり、タイ人でないより多くの外国人の人が、私たちのたたかいを理解するチャンスを得ていく。そういうふうにして、ひとりでも多くの人たちが、私たちのたたかいかい、私たちのほんとうの気持をわかつてくださるといふことは、そしてそれがひろがっていくということは、私たちにとつて大きな連帯であり、こころの支えであり、私たちにまたはね返つてきます。そういうものだと思つていきます。

## 与太浜造船から佐伯造船へ

山元清多

てきたといえる内容であります。この合理化案は、組合にとつては企業倒産よりもなお苛酷なものであり絶対に受け入れることは出来ないものであります。(78年5月1日付け分会ピラ)

九州に来てから、七月中旬とは思えない肌寒い雨の日が続いてた。その雨が一日だけカラリと晴れ上がった日の正午前、私は臼杵鉄工佐伯造船所の西門をくぐつた。門の左右には、指名解雇撤回と操業再開を要求するスローガンが大書されている。正面におだやかな佐伯湾の海面、高いクレーンが夏空の下で止まつたまま立つている。自転車が一台ゆつくりと走つて行く。右手の建物の前で若い労働者が小型の宣伝カーを洗っている。そのまだ真新しい車体が水にぬれて陽に光っている。全造船機械佐伯造船分会の事務所は、門をはいってすぐ左手にあつた。

「四月二十七日、臼杵鉄工所社長より組合に対し、別紙内容の合理化案がなされて来ました。この内容は、①佐伯工場の閉鎖、②五五〇名の首切り、③労働条件の切り下げ。以上三点に要約されるものであります。およそ考えられるすべての合理化が出され

何度か電話にも出てくれた女子事務員さんが、右奥の小さな応接室に案内してくれ、お茶を出してくれた。裏手にもう一棟プレハブが建つていて、そのむこうは切り立つた崖に塞がれている。レザー張りのソファには毛布がたんであり、壁には「船よこせ」のポスターと野球大会の表彰状が何枚か。隅にNHKと書かれたカメラや機材が置かれているところを見ると、NHKが取材に来ているのだろう。雑然とした自分たちの稽古場の溜り場によく似た感じのその応接室で、松下委員長が現われるのを待ちながら、自分がここに来た理由をどう説明したらよいか、考えていた。

昨年夏、私は(与太浜パラダイス)という戯曲を七年ぶりに書い



た。それは、十月に台風で屋根部分をスタズタに引き裂かれ、応急補修を施した黒色テントで上演された。

戯曲を書くという作業の長い中断を経て、あれこれ迷った末、私はまた「工場」を舞台にした芝居を考えはじめていた。十一年前に友人が経営する工員十人ほどの町工場にひと月ほど住みこんで、そこで見聞きしたことを使って「海賊」というのはじめての芝居を書いた。そのとき町工場を選んだのは、小さな頃から馴れ親しんだ、近い世界であつたからにすぎない。いま、もうひとまわり大きな広がりとして工場を世界とすれば——そんな発想に導かれて、結局構想は、ある中手造船所の数ヶ月の労働争議を時間軸にして、元水泳選手で造船所に帰って来た純情なヒロインが、保護者である造船所長、本工、下請工の間で、ピリヤードの空き玉のように動いていくというふうなものになつていった。

その際手がかりにしたのは、本屋で探し出した十数冊の労働現場のルポや手記のほか、戦後の労働運動に関する記録の類で、実際の造船所を見学したりはしなかつたのである。

手記の本から見つけたエピソードや人物などの断片を換骨奪胎しながら、仮空の造船所の仮空の争議の数ヶ月をつくり上げていった。(与太浜)という地名さえ、倒産した四国の波止浜造船のモジリである)を作る過程では、私は造船所に出かけてみる必要をさして感じなかつた。造船所であつて造船所ではない。そこであつて、どこでもあつたような世界を虚構することに集中するべきだと思つていた。結果は、お世辞にも上々とはいえなかつた。しかし、とにかく工場を世界とする芝居に多少意識的に手をつけはじめた。間違ひを

間違ひとして発見しながら、それを先に進めてみる必要がある。そこであつて、どこでもある——そう考えながら、(与太浜)は、どこでもなくて、どこでもあるというふうなものになつてしまつたのかも知れない。本末転倒かも知れないが、七年ぶりの戯曲を書き、それが上演されたあとで、工場の実際をこの目で見なければと思ひはじめた。もし、今度戯曲を書くとしたら、実際の工場に取材して、それをもとに書いてみようとも思ひはじめた。

佐伯造船に行つてみることをすすめてくれたのは鎌田慧氏である。鎌田さんは、全造船 佐伯分会は現在最も強力な闘争を地域ぐるみで展開しており、構内への出入りも見学も自由にできる。造船所の構内で黒色テントの公演ができないかという相談ぐらひしてみたらどうかともいつてくれた。それから半年近くたつていた。

「六月十日、臼杵鉄工株式会社 矢野社長は佐伯造船工場閉鎖反対共闘会議との交渉で、『四月二十七日提案の合理化案は凍結する』、『佐伯工場は存続する』、『今後は労使で再建に努力する』の三点を柱とする確認書に調印しました。(略)市民ぐるみの闘いの盛り上がり、ついにこの輝しい確認書として実つたのです。」

(78・6・10付けピラ)

ちようど昼休みになつたらしく、作業服姿の分会員たちが、あわただしく出入りしはじめた。「昼メシどうします？」といいながらやつてきた小柄ががっしりした男が分会の松下委員だつた。自分が属している黒色テント68/71のこと、工場の芝居を書く手がかりと

して造船所を見学したり、分会の人たちの話を聞いたりしたいのだがというふうなひどくばく然とした来意をじつと聞いてくれたが、「演劇のことはまるで分らんですよ」といいながら、立ち上がり、すぐもどつて来ると私の前にドサリとぶ厚いペーパー類を置いた。よく整理されたこれまでの闘争記録や資料だつた。私が佐伯についてもつて知る知識は鎌田氏の『倒産』と『労働現場』で読んだルポルタージュしかない。そのかなりの量の記録と資料を前に、私は「まず読ませてもらいます。これから何度か可能なかぎり足を運んで来ますので、よろしく」という以外になかつた。まだ何も知らないという地点から、はじめてみる以外にないことを思い知つた。

話は、テントで旅する私たちの演劇に移つていった。鎌田さんに佐伯行きをすすめてから、半年もたつてようやく佐伯に来ることができたのは、今年の春「西遊記」で東北・北海道に旅した黒色テントが、秋に四年ぶりで同じ「西遊記」をもつて九州までの旅を行なうことになつて、その準備のため大分、宮崎に外向かなければならなくなつたからだ。私は鹿児島、熊本の準備を同行のメンバーに頼んで、ひとり逃げるように佐伯までもどつたのである。私は佐伯での公演実現をあてにして来たわけではないが、一夜造船所の内部にテントを張り、町の人たちが逆に造船所の中へ芝居を見に来るというかたちが実現できたりすれば非常におもしろいのではないかという考えはもつていた。

その話をしてみると、松下委員長はその試みそのものには興味をひかれたらしいが、もう少し早い時期だつたならば可能であつたが、タイミングが悪いと残念そうな表情をみせた。現在は指名解雇され

た分会員が、とにかく生産点にはいらなければということでも貸付工というかたちで現場に戻つた矢先であるというのが、その理由だつた。しかし、その時はその事柄の意味を私は明確な輪郭で把握することができなかつた。生産点に踏みとどまつていないと、闘争がどうして持続しにくいのだろうという側面でのみしか理解できなかった。

「(工場閉鎖の合理化案粉碎)以降、組合は会社再建に向けて、会社提案の希望退職四二〇名という首切りを、涙をのんで認め、(略)会社の経営計画を明らかにする様再三にわたり困交申込みを行なつて来ました。(略)矢野社長は就任以来一隻の受注もしてない事から、企業の再建は、先ず仕事を確保することにある、との組合の主張に対しても依然としてその努力はなされず、七月二十一日には四月に出して来た合理化内容を上廻るきびしい合理化の提案をして来たのです。従つて組合は、会社に対し、企業再建の考えはあるのかと強く追求してきました。この返答が今回の会社更生法申請となつて、はね返つて来たのです。」

(78・7・29付けピラ)

若い労働者が、ヘルメットをもつて来てくれて、造船所を案内してくれた。門をはいったときに正面に見えたクレインの両側に海に向つて傾斜した船台があつた。船の乗つていない空の船台には、巨大なクサビ形の盤木がならべはじめられ、ブロックを乗せる準備をしているということだつた。なるほど、船台の左手にはすでにいく

つかのブロックが出来上がって置かれている。そのカゲの小屋のよ  
うな建物には溶接実験室と書かれている。案内してくれた青年が、  
ふと気になるように中をのぞく。一人の労働者がじつと溶接のせん  
光の上にかがみこんでいる。青年は「よお」といつて笑いかけ、そ  
のままなにごともなかったように歩きだした。屋根のあるだっ広  
い作業場の左手では鉄板を切断し、曲げる作業をしているらしいグ  
ループがずつと向うに一組、右手では溶接グループが何組か。閑散  
としたなかで、しかし作業は行なわれている。左はじの60トンク  
レーンが、一基だけゆっくりと海の方へ移動している。その光景の意  
味にも気づかず、私はやはり、愚かにも操業はわずかずつは行なわ  
れているのだなと思っただけで、はじめて見る作業や工場の機械に  
目をうばわれていた。

「会社が危機に入った去年秋から今日までの間に、佐伯造船所だけ  
でいえば、下請を含め約一、三〇〇名だった従業員が、わずか五  
五〇名程度(略)工場存続が確認されて以降、たつた四人しかい  
ない管理職のもとで『俺たちがやってみよう』と船の建造を続けて  
きた組合のどこをとらえれば『会社つぶし』などと言えるのでし  
ょう。これ以上私たちに何をしろというのでしょうか。企業の大  
めなら『だまって死ね』というのでしょうか。」

(78・8・2付けピラ)

分会事務所に戻ってみると、二階から降りて来た松下委員長が、  
「私これから現場で作業です」といいながら、皮のキャハンをつけは

まっております、七八年の工場閉鎖提案にはじまる攻勢は、明らかにその  
本格化であったこと。佐伯工場のみ閉鎖提案——撤回と引きかえ  
の希望退職、一六億九〇〇〇万円の退職金が支払われ、再建のメド  
がついたといった舌の根のかわかないうちの更正法申請。更生が開  
始されたものの受注ゼロの状態を長びかせる管財人。一年後には、  
前代未聞の指名解雇。それ以降の経過を私は知っていなかった。

「石播は持去った一二七番船に替る船を直ちに佐伯工場に帰さ  
なければならぬ」これは去年六月二日、大分県地方労働委員  
会が石播に対して決定した命令文です。以来九ヶ月を経た今でも  
臼杵工場には十隻の船(この内七隻は石播より廻った船)が契約  
され、引続き数隻の引合いがあるにもかかわらず、佐伯工場には  
一隻の船も受注がなされず、見通しすら立っていない状況であり  
ます。(80・3・23付けピラ)「管財人が何故に船をとろうとし  
ないのか、即ち船が来れば人員不足を来たし、昨年七月に行なっ  
た指名解雇がいかに不法、不当なものであるかを立証する事にも  
なり、管財人は正に苦境に立たざるを得なくなり。」

(80・5・1付けピラ)

「地位確認」を求める裁判闘争、中労委などで石播・管財人の悪ら  
つな意図とその違法性を暴露していくことと並行して、分会の闘争  
はなにがなんでも船台に船を乗せることに全力を集中していく。ほ  
ぼ月を追って出されているピラを読みすすめてみれば、そのことは  
はっきり分る。倒産を意志する資本に対して生産の持続を対置させ

じめた。何の仕事か聞いてみると溶接ですという返事。白っぽいバ  
ックスキンのキャハンは、作業靴の上をすつぽりとおおうようにつ  
くられている。「こいつをつけてないと、火花が靴の皮の合せ目に入  
って熱いんですよ。何だか変な気分ですよ。なにしろ現場で仕事  
をするのは十五年ぶりですからね」苦笑して出て行く松下さんを見  
送りながら、貸付工として現場にはいったという事実が改めて気  
にかかりはじめた。

「臼杵鉄工所の小野・馬場両管財人は、七月二十七日、佐伯工場だ  
けを狙い定め、組合執行部・青年部役員全員を含む八十四名もの  
大量指名解雇を行いました。佐伯工場閉鎖提案に始まっていたい  
ゆる臼鉄倒産劇が、実は『石播の組合つぶしにある』と大分県地  
労委で認められた今、管財人のこのような行動は『石播の野望に手  
貸した』といわれてもしかたのないことです。(略)一つの会社  
内にある二つの組合の一方だけに的をしぼったばかりか、組合執  
行部と青年部役員を一人残らず狙い打った今日の指名解雇は、い  
かに弁解しようとも、組合つぶし以外の何物でもありません。私  
たちはこれまで全国でこれほど悪質な組合つぶしの狙いをもった  
指名解雇の例を知りません。」

(79・8・4付けピラ)

大・中手の造船労働者が、六〇年代中ばから軒並み二組分裂して、  
同盟系の造船重機労連に組織されていく中で、石播の系列下におり  
ながら、二組結成の動きを完全につぶし、唯一総評系全造船の中心  
をになって来た佐伯分会に対する石播の攻撃は、六七年当時から始

る労働組合。労働組合の生産管理闘争に似た構図が見えてくる。  
夕方、作業を終えて帰宅前の時間をさいてくれた年長労働者のI  
さんは、佐伯分会が全国でも稀な実例として二組を完全につぶし、  
大資本石播に食らいつく闘争を持続できるのは、佐伯という地域性  
の故ではないかといった。「もともと陸の孤島といわれたところで、  
地域の中で結びつきが非常に強いところ。組合のつながりに  
しても、会社の中だけでなく会社の外にも校区別の家族会などが組  
織されていることが強味なんだね」七八年からの闘争にしても、は  
じめから地域を巻きこんだかたちをとっている。たんなる、地場産  
業の保持というにとどまらない地域との関係が、佐伯分会の運動を  
つくりあげている。

「臼杵鉄工所再建のカギは、佐伯工場の船台に何が何でも新造船  
を乗せること」という県民ぐるみの要求がいに実現しました。  
しかし二年前七二〇人を数えた佐伯工場は、今わずかに一五〇名。  
再建第一船をどこおりになく引渡すだけでも、少なくともあと二  
〇〇名は必要です。石播や管財人は、大量首切りした一方で、新  
たに労働者を確保しなければならなくなつたわけです。

(80・5・23付けピラ)

ついさつき、私が見たブロックは、明らかに再建第一船のケミカ  
ルタンカー(二万四千トン)のものだったのだ。若いAさんが、説  
明してくれた。船が来た。納期までに仕上げるには、だれがみたく  
て人手が足りない。一五〇名まで減らせば操業再開は可能だといっ

ていた管財人は、逆に減らしたことよって苦しくなった。熟練工がそろっている指名解雇者を会社にもどす責任と必要がでてきた。

「地位確認」を求める裁判でも、裁判長から指名解雇をとり消すという内容の和解案が強力に出された。しかし石播・管財人は人手は下請で補充するといつて、絶対に応じようとしなない。被解雇者が、下請として現場に入るのでは何の意味もない。会社の分会つぶしに屈することになる。会社側の意図ははっきりしている。このままずると裁判を引きのばして、最少の借金だけは払いながら仕事はさせないで、実質的な兵糧攻めにして、五十八名を分断し、つぶすつもりなのだ。しかも、従来の裁判闘争例を見ても一担指名解雇されたものが、復帰できる可能性は少ない。下請工か、本工としての復帰をじつと待つだけか。彼らは選択をせまられた。そして、下請工でもなく、本工でもないかたちで、現場に戻る道を選んだ。それが貸付工である。Iさんがいう。

「貸付工というのは、下請会社がその人間を長期にわたって一定の企業にその従業員として貸付けるもので、古くから造船の世界にあつた解雇慣習なんですよ」

八十四名の被解雇者のうち裁判にうったえた五十三人が、次々に、8月1日を期して全員が貸付工として現場に戻る。Aさんは、「完全な指名解雇の撤回をかちとつたわけではないので、今後の問題はこのこされているね。会社はわれわれに対して、まだまだ兵糧攻めをしかけてくるだろうし——」

しかし、とにかく組合の中核は確保し、工場再建のために船造りに全力でとり組むことができることにはなつた。船台に一台の船を

乗せることは、分会にとって、たんなるスローガンでも、会社を追いつめる口実でもない。生産の再開と持続には、運動の実質がこもっている。十五年間組合の専従として現場での仕事から離れていた松下委員長がいそいそとキャハンをつけて、照れくさそうに出かけていったことの意味は、そういうことだったのではないか。組合員のひとり、

「分裂下の闘い」というタイトルでつた8ミリフィルムには、マラソン・リレー大会、文化祭、家族会、広い従業員控室で行なわれる家族ぐるみの「慰労会」ともいえる全員集会など、闘いというより「お祭り」ばかりが記録されているのだという。定時になり現場から引きあげてきた松下委員長は、Iさんに黒鯛釣りのポイントを教えろといひ、Iさんの方は「こればかりはたとえ委員長でもだめだ」とモメている。Aさんは、年に一度青年部員が作る劇の話をしてくれた。「闘争の中で気がついたことを題材に脚本から自分たちで全部作るんです。うまいとはいえないけれど、闘争やつてる連中がやつて、闘争やつてる人間が見ると、それなりにジーンとしたりするんですよ」彼らの闘争にはやはり文化とよべるもの、自分たちの文化を必要とする根拠が存在するような気がする。

尻切れトンボで申しわけないが、ここまでが私のはじめての佐伯行きの報告めいたものである。この次は、もう少し焦点を定めて、西門をくぐれるような気がしている。そのとき、分会に置いてきた〈与太浜〉に対する批判を聞かせてもらえぬにちがいない。

## フィリピン活動家のみた日本の現状

以下に述べることは、日本人自身が描く日本の現状についての報告書である。この報告書は、日本についての諸調査や学術的文献を編集したものではない。むしろ、この報告書は、日本人——農民、労働者、学生、各種専門家、知識人たち——との、また彼ら自身による対話、議論、説明など、二ヵ月間におよぶ直接の出会いから生れたものである。

彼らが示すこの日本の現状は、彼ら自身を写しだす鏡である。この鏡を通して、日本人が、人民としての彼ら自身の強さと弱さを理解できれば、望ましいことである。そうすることで、彼らが自身自身だけではなく、第三世界の人民をも非人間化している構造に効果的に挑戦することができるようになることがのぞまれている。

アジア人にとって、日本の持つ意味は何であろうか。日本は幾千もの中国人、フィリピン人、インドネシア人、朝鮮人、台湾人を虐殺した征服者である。日本人は貿易や商業流通で第三世界を相手と

して利益を得ている。日本人は貧困にうちひしがれた諸国で安い労働力を搾取する投資家である。日本人は売春婦を買うために数日間の旅行をする旅行者である。日本人はゼイタク品にとりかこまれており、経済的不況があつても安定した生活のできる裕福な人である。日本人はアジアにおける西欧人である。

だがしかし、私たちは二ヵ月の日本滞在とその間おこなわれた対話と議論を通じて、私たちの日本にたいする考えと態度をあらためた。しかも、国家としての日本と人民としての日本は区別されなければならぬ。国家とは、民衆と諸外国との関係について機能するすべての機構と制度を含んでいる。このことは政府——民政と軍事、企業——多国籍企業と中小企業、そして市民にサービスする諸機構を意味している。国民とは、その出生によってまたは選択によって、その国家に居住する人びとのことをいう。彼らはその階級——すなわち農民、労働者、知識人、専門家——に分類される。これらの人びとにとって、国家とは自前につくられているものである。国家と

しての日本という文脈でみたと、私たちはどのような人びとと討論してきたのだろうか。彼らは自分たちのことをどのようか考えているのだろうか。彼らは国家をどのようにみているのだろうか。私たちは日本で二カ月間の滞在のあいだにあつたこれらの人びとについて、どのように結論づけなければならないのだろうか。ここに記述するのは、日本人の生きかた、すなわち日本国家が第三世界諸国との間につくられ、今なお続いている誤解の大きなギャップを埋めていくことができるようにと、すすんでその心情・気持をのぞかせてくれた日本人の生きかたの印象である。

日に三度など食事をしたこともないし、働きすぎるほど働いても賃金さえもらえないアジア人にとって、日本に住むことは理想である。すなわち、日に三度の食事をしてもおかつかつありあまる食料があり、自国の海から、あるいは第三世界諸国の海からたえず魚は供給されており、四つのちがうシーズンのためにさまざまな衣料があり、国家による無料医療保障があり、電子装置・電気製品があり、高賃金が支払われていること、などである。日本ではスリやドロボウの心配をする人はいない。なぜならスリやドロボウはきわめて少ないし、たとえ他人のものをぬすんだとしても、それは多くの場合スリルを楽しんでいるのであつて、現実の必要からぬすんでいるのではない。失業者は一定の手当を国家から支給される。アジアや第三世界でみられるような大量のコジキをみかけることはない。日本の民衆は満足しており、より以上にもとめるものは実際にもないように思える。あらゆるものが国家によって民衆に供給されているようにみうけられる。もしも彼らが金持ちでかつ裕福であるならば、

うした敗北感が生れるのはなぜであろうか。この社会に対し闘いを開始しようとしても、どうも勝利を確信することができないし、自分たちの社会を改革することにたいして違和感をいだきつづけている民衆感覚の根本的原因とは、いったい何なのであるか。

それはアジアや第三世界諸国の抑圧された社会よりも、ずっと暴力的な社会に住み暮していることから生じている。アジアと第三世界の民衆は、アメリカや日本のような帝国主義国の陰謀によって人間以下の状況におとし入れられており、同様に飢餓と栄養失調にあえぎ、伝染病によつて死にみまわれ、そのおのの国家によつて搾取され、無力化され、野蛮化されている。すべての第三世界諸国・アジアのすべての民衆に対する暴力はこのような抑圧形態をとる。こうした抑圧された民衆には、失敗することを含めて、選択できる生きかたの権利と義務は奪い去られている。しかし、こうした暴力に対抗するアジア・第三世界の人民の闘争には、それを埋めあわせるに十分な気高きがある。物はなくても、彼らには人を結びつけ関係づける仲間としての人間関係のような豊かな豊かさがある。彼らは人間が自然から享受できる純粋さをいまだに保持しつづけている。すなわち、新鮮な空気、澄んだ空、豊富な太陽光線、青い海と清らかな水がある。

これらの多くの国では、民衆はいまでも抑圧された人びとにたいする公正・正義・愛情のために闘う宗教をもっている。彼らはアジア人として、ラテン・アメリカ人として、自分たちが何ものであるかを確認しえる豊かな伝統をもっている。このように彼らの顔は微笑みでいきいきしており、彼らは心からあたたかな笑いかたをする。

彼らは幸福であるにちがいない。

しかし、たえず拡大する工業化と高度経済成長政策の結果として、国家が民衆にもたらした裕福さのために、日本民衆がひじょうに高価な代償を支払っていることを、アジア人はほとんど知っていない。日本民衆の大半は彼らの患っている病いの根本的な理由についても知っていないが、工業化の影響についてはよく知らされている。二人の子持ちのごくふつうの父親である労働者は次のように言っている。

「私には学校に行っている二人の子どもがいます。子どもたちは、国家が子どもたちに提供することのできるもの——すなわち食料、衣服、そして住居——をもっている。学校では、子どもたちはパングラディシユの子どもたちにそれぞれ一本ずつの鉛筆を送るよう強制されます。パングラディシユの人びとは貧しいかもしれないが、精神的には裕福です。私の二人の子どもたちは、精神的には貧しいのです」

そうだ。これが日本の民衆が物質的な豊かさのなかで生活するために支払わなければならない代償である。日本の子どもたちのなかには、何の希望もあたえられないこのような社会に自分たちを生んだことで、自分の両親を非難する子どももままだ。

日本の青年たちの間にあるこうした絶望感や、精神的に貧困であり、かつそのような状態に満足している二人の子どもの父親もっている絶望感や、国家による首切り合理化に反対して闘っている日本民衆のもっているあきらめなどはどこから生れてくるのだろうか。よく訓練され、高度な教育を受けた日本の活動家のなかにさえ、こ

抑圧からの解放をめざす闘いにはよろこびがある。

日本民衆がこうむっている暴力は、帝国主義国家によって支配されているという現実から生みだされている。こうした国家は、原理的にますます独占資本を擁護し、また帝国主義的権力とその利益を奪い放逐するであろうアジア民衆の革命に敵対して侵略をすすめる目的をもっている。石油価格の劇的な上昇と不況によつてもたらされた深まりゆく世界危機のために、日本は独占資本の利益と安全を守ることもできるように、日本民衆にその犠牲を転化してきている。第二次世界大戦で、天皇のために四人の息子の命をささげた年老いた婦人についての話をいまでも思いだす。日本は、その市場を海外にひろげ、アジア諸国から天然資源を奪いとるために、第二次世界大戦中にアジアの国々を侵略した。日本国家は天皇制を利用して、民衆を国家の象徴のために死ぬことへとかりたてた。それはおおいに効果をもたらした。

それゆえ、日本国家の全機構と権力は、権威や現状の維持、そして法と秩序に何の疑問もいれずに服従させるイデオロギーを深く民衆の心に染みこませるよう利用されている。だから国家は、いわゆるこうした諸価値の名において、農民を追放し、農民が彼らの富と生命を得ている母なる大地へのかかりを根っこから奪い取っている。ブルドーザーで荒らされた大地、埋め立てられた海の上に、電気産業、自動車、鉄鋼、バルブのような大産業のための巨大な工場群が建設されている。労働者は決められた時間内に、決められたスピードではたらかないと、すぐさま懲罰をうける。労働組合は幹部と組合員が経営者の政策に従うかぎりにおいて、工場内に存在す

ることがゆるされる。帝国主義に反対するイデオロギーを支持するような学校教科書はきびしく検閲をうける。言語は、国家のために効率的にはたらく労働者兵士をつくるために統一されている。宗教は、戦死にたいする民衆のヒロイズムをつくりだし、現在の軍事力が民衆を助けるためにあるものだという考えをよびおこすために使われている。日本では法によって銃の使用が禁じられているので、活動家たちは国家権力に対して銃を用いることはしない。

民衆に帝国主義的イデオロギーを強制したことによってあきらかになった事実は、日本の民衆がアジアと第三世界の搾取・抑圧された社会よりも、ずっと暴力的な社会に住んでいるという私たちの主張を証明するに十分な指標となるであろう。民衆とその祖先がたがやし、富の源となつてきた大地から根こそぎ放逐された農民・漁民は、工場と巨大機械、汚染され煙で赤くなつた空、騒音にあふれた都市に投げだされた。民衆は薬品で汚染された水のみ、空気を吸い、化学栽培の食物をたべ、徐々に死に追いやられているのだ。民衆の摂取する空気、食物、水には何の生命もエネルギーも見いだせない。工場を支配する機械と四方を壁でかこわれている教室には、死の雰囲気ただよっている。労働者は、彼らがふだん使うエネルギーと強度の三倍のスピードで同じ筋肉を使用するよう命じられているので、徐々に死に追いやられている。そして機械と同じように使いつてられてゆく。なぜなら、彼らはそのときには、耐えがたい肩や首の痛み、猛烈な背中の痛み、顔面マヒにおかされている。こうなつてしまった労働者は、もはや経営者や企業にとつては無用であり、すてられるべき存在であるので、死んだも同然である。資本

本の民衆はストもうてるし、デモもできる、座りこみも可能だし、新聞・雑誌で批評活動もできる、と。日本は情報収集のために、コンピュータや電子機器に依存しているので、現状を動かそうとするグループの動向を国家が察知するのは容易である。数時間もあれば、彼らは逮捕され、殺害されてしまう。他方、諸政党と裁判所という、二つの国家機構は、強力な警察と抑圧的な軍に抗して民衆の擁護者の側にまわつたことは一度もない。

政党は、民衆の福祉のためにはたらいでいるとか、国家の無法ぶりから民衆を守ることができるとかのような幻想を与えているのがせいぜいだ。政党は、彼らの利害、すなわち無防備な民衆を保護することが彼らの富を防衛する利害にそつて行動している支配階級によつて構成されている。日本共産党は三里塚のように土地から放逐される農民のために闘うのではなく、農民たちが営々として持続してきた暴力的闘争を拒みつづけている。裁判所も同様に絶望的である。なぜなら、彼らもあまりに官僚化されすぎており、支配階級の手先ばかりなので、たいていの場合、権利を守っているにすぎない民衆にさえおそいかかるという罪を犯している不正な警察や軍に抗する決定を下すことはできない。しかし、外見上はとも解決できそうにもない諸問題も、日本の民衆がこうした運命論、無気力、絶望からみずから解放するよろこびを理解するようになれば、解決することは可能だ。あまりにも長い間仲間としての人間関係を機械によつて疎外されてきたので民衆はよろこびと、拒絶されようとも勇氣と情熱をささげるべきものを忘れてしまった。仲間としての結びつきのために、多くの価値を生みだす人間集団の一員であるよりも、

主義世界では、重要なものは人ではなく機械である。人が機械のスピードと効率を倍化させられるならば、そのときのみ資本家にとつて人が重要なものとなる。

学校教育は、物質的価値感と国家イデオロギーというあやまった考えかたを浸透させている。教育は、学生たちに彼らをとるかこむ現実を赤裸々にさらしてみせることはない。学生たちは、秩序を揺りうごかそうとは思ひもしない因襲的な教師と、不毛な学術的教科書によつて包囲された教室のなかにとじこめられている。一方教室の外では、社会は矛盾にみちみちており、その矛盾から生まれる力学で社会がダイナミックに動いているにもかかわらず、学生たちはきびしいけれども触れてみれば興味深い現実——すなわち愛と利己主義、個人主義と協同そして地方分権主義、自由と抑圧といったものを分析したり、自由に探究したりすることはない。それゆえ学生たちは、何のよろこびももたず、学校の退屈な授業をこなし、よい社会的地位を得るためにのみ勉強する。教育は、耳をかたむけ、質問を発し、批判し、論争し、示威運動をする活力を学生たちから奪いつつてきた。多くの学生たちは、合格点をとらなければならぬという、彼らに課せられた社会の重圧の前に耐えきれずに自殺していることは何の不思議もないことだ。

この野蛮な制度を打ち壊したり、彼らにせめかたてているスピードをゆるめたりしようとは必死に努力したとしても、それでも民衆は国家の軍事・警察力によつてヤラれてしまうような深い暴力にさらされている。国家は、いま、日本が世界でもっとも自由な国のひとつであると思ひこませるように民衆をリードしている。すなわち、日

機械の一部としてしか人間を機能させない資本主義国家によつて、人間的なまじわりは破壊されてきた。

民衆には、彼らが実際に考え感じていることを他人に赤裸々にみせようとする種々のつめたさがある。このつめたさが、多くの幻滅をあじわつた学生たちが学校からドロップ・アウトし、愛情、忍耐、理解、労働、悲しみ、闘争、自然などを経験するために都市をはなれていった理由である。このような豊かな人間的価値を与えることのできる人びと——農民の数は、高度に暴力的な社会に生活しているという、まさにその事実のために減少しつづけている。国家は、民衆がこのような構造を変えようにも、そのことに何のよろこびも幸福感も感じていないということをよくみている。こうしたことが、物質的富にあふれた日本の民衆が支払わなければならない高価な代償である。

○チラシ・パンフレットの製作、お引き受け致します。

○印刷・製本はもちろん編集作業も請け負います。

○社言も打てますので御利用ください。

## 舎球気軽

企画・タイプ・版下・写植  
コピー・デザイン・編集

新宿区高田馬場2-7-11  
コーポ高田306  
日本AA作家会議事務局内  
☎160 ☎03-205-2794

# フィリピン農民の生活

私はカラバオ（水牛）に餌をやるために朝の四時に起きる。私は、夜の七時から八時に仕事を終える。農民は日曜日以外は毎日働く。私たちは米を主食とし、ときどき野菜を食べる。たいていはごはんに塩をふりかけて食べている。月に一度、肉を食べることができればいい方だ。こうした食事のために農民の妻や子供は病気にかかりやすい。たとえ、妻が妊娠しても夫といっしょに畑で仕事をやる。小作人である私は地主が指定する作物を作らなければならぬ。小作人としての私たちはときどき地主の家で働くことを強制される。もし私たちが地主への個人的借金を支払うことができなかったなら私たちが子供は地主の家

事使用人にされる。私は地主の家にいくと、大きな家の中で最もきれいな部屋で待たされる。食事は犬が食べるようなものだけを与える。地主の農場では「ピヤド」と呼ばれる監督が私たちの仕事を監督する。ピヤドは地主の土地を監督するために地主に雇われている。ピヤドは地主よりも厳しい。

私は年、二回作付けする。最初の作付けは食料として収穫するが、二回目は種を作るためのものである。私は三ヘクタールの土地を耕作しているが、次の数字は一収穫期にかかる費用である。

## 1 化学肥料

- 一袋（四五kg）のチッソ肥料の値段 一七二ペソ
- 一ヘクタールにつき十二袋使う 一七二ペソ×十二＝二〇六四ペソ
- 三ヘクタール二〇六四×三＝七一九二ペソ
- 2 農薬（つねに種類を変えなければならない）
- 一ピンの費用八六ペソ
- 八六ペソ×十二＝一〇三二ペソ
- 一〇三二×三＝三〇九六ペソ

## 3 種（毎年品種を変えなければいけない）

- 一袋の費用一八〇ペソ
- 一八〇ペソ×十二＝二一六〇ペソ
- 二一六〇×三＝六四八〇ペソ
- 肥料 七一九二
- 農薬 三〇九六
- 種 六四八〇
- 合計一六七六八ペソ

地主と小作人との収穫物の分配率は、地主がカラバオと農器具を所有している場合は三分の一である。また、小作人がそれらを所有している場合は四分の一である。貧困から救われるのは作物の収穫期間中である。だが、この時期には米とトウモロコシの値段は大変

安い。仲介人が私たちの村にやってきて、一袋につきたった二十七ペソで籾米を買っていく。かりに一ヘクタールにつき一〇〇袋生産したとしたら、籾米の生産コストよりもはるかに少ない八一〇〇ペソしか収入が得られない。しかし、もちろん、生産物のすべてを売るわけにはいかない。家族のためと地主への小作料の三分の一か四分の一を差し引かなければならない。

私たちは収穫物を五ヶ月間以内に消費してしまう。だから、残りの七ヶ月間は生活するのが大変である。七ヶ月間のうち五ヶ月間は米やトウモロコシを仲介人からまだ買うことができる。この時期は米の値段は高くなっている。一袋の精米は六十ペソである。私たちは残りの二ヶ月間を生きたために高利貸から三分の一の利子つきのお金を借りる。もし、高利貸から一〇〇ペソ借金したなら、返済の時には一五〇ペソ支払うか、一袋の籾米を利子として支払わなければならない。仲介人は高利貸でもある。これらのことが毎年、私たちを苦しめている問題である。

私たちは政治的発言権がない。政府はた

え私たちが慈悲を求めて彼らの前にひざまずいたとしても、私たちのいうことを聞かないだろう。彼らは私たちが望むすべてのものを得る。それはなぜか。私たちの村での軍事化は私たちにとって大変痛々しいものである。軍隊は農民を支配するために使われている。今日、軍隊はわが国において、政府のプロگرامを実行する機構である。もし、私たち農民がある政府のプログラムに従わなかったとき、軍人に鶏を提供すれば私たちは許してもらえない。私たち農民が集まって私たちの問題や活動について議論することは軍隊とそのスパイの存在のためにたいへん困難である。将軍連中は資本家になりたいために土地を強奪する。また、軍隊は農民から土地を得ようとする資本家を助ける。もし、私たちが自分の土地を売ることが拒否したなら、軍隊は軍事力を使用する。

たいへん多くの私の仲間の農民たちはひどい低価格で彼らの土地を資本家に売った。もし農民たちが彼らの土地をそんなに低い価格で売ることが頑固に拒むなら、軍隊は彼らを殺すか拷問にかけるかあるいは彼らを破滅させる。かつて私たちの村の一人の農民は拷問にかけられた。村人のすべてが農民を拷問に

かけた軍人を私たちの土地から追い出すように軍の地方指令部に請願した。彼に新しく取り替った軍人はもつと残忍であった。彼は村人に「行儀よくふるまえ、さもなければ、お前たちも拷問にかけられるぞ」と言った。そのとき、彼はいく人かの農民に拷問部屋の「蟻の家」の頂きとちようど同じ高さに防壁棚を作るように要求した。防壁棚を作らなければならない。防壁棚を作ることを要求された四人はある日、近くの井戸の水を飲んで、彼らは仕事中にこの軍人の許可なしに水を飲んだというので、すぐさま、防壁棚の中に投げ込まれてしまった。これは私たちにとつて痛々しいことであった。私たちは農民は防壁棚を作らされ、そして私たちはその中に入れられる。別のケースでは、この軍人は少年や少女に村の中で夜、兵士たちのために催されるダンスに参加するように強制した。

また他のケースでは、軍人たちは民間郷土防衛隊のいく人かに軍人たちが眠っている間中、彼らをガードするように命じた。私たちはもし軍隊が酒に酔っているとき、まったくなんの理由もなしにみさかいなしに人々を殺したり、拷問にかけたりすることを特に恐れている。私たちの村の婦人を軍人が強姦したことがあった。そして近くに住んでいるたくさん

の女性が私たちの村に配属された軍人の二弟や遊びの対象になった。軍事化された社会の下での私たちの生活とはこのようなものである。

一方、わが政府は私たちにおびただしい数の計画を押しつける。政府はこれらの計画は国にとっていいことだというが、私たちの観点からいうとこれらの計画は私たちを困惑させる。土地問題を解決するために、マルコス大統領は土地改革のための大統領布告二七号を布告した。この布告で、小作人たちは自分たちの土地をついに所有できると思っていたいへん喜んだ。だが、二ヵ月後には、大統領の通達書によって、土地改革の対象は米とトウモロコシの小作地だけになるということになった。これは多国籍企業の所有する砂糖、バナナ、パイナップル、ゴム、ココナッツ等のプランテーションは免除されることを意味した。政府の土地改革計画は多国籍企業と民族資本家の資産だけを守ることは明らかだ。とにかく、私たちが耕している米とトウモロコシの土地を私たちが所有できるようにするという土地改革計画の下では、私たちはサマハンナヨン（農協）に加入するよう政府に要求

したが、私たちは木を切ることはしなかった。さらに私たちは植樹する側である。私たちは私たちの農場を置き去りにして、森に苗木を取りに行かなければならない。この計画は私たちの農作業に影響する。

家の美化計画というのがあって、農民は家のまわりに垣根を作らなければいけない。たとえ私たちの家がきたなくても、家のまわりの垣根にペンキが塗られるなら、私たちの家の汚れが流れ落ちてきれいになると考えられているのだろう。そこで、私たちは垣根を作るために木を切り倒さなければならぬ。これは政府の植樹計画と矛盾している。私たちは貧しいにもかかわらず、この垣根を作るために必要とする釘やペンキを多国籍企業によつて生産されている。家を美化する命令に従わなかったら、軍隊は私たちを罰するので、私たちは垣根のために釘やペンキを買うことを強制される。

緑の革命計画というのがあって、私たちは自分の家の庭に野菜を植えないなら、私たちは地主の許可なしで耕作する土地では

される。サマハンナヨンの下では、私たちはさらにマサガナ九計画を支持することを求められる。マサガナ九計画では化学肥料と農薬、そして灌用水を使用することで、一家が米あるいはトウモロコシを九袋生産するものと考えられている。政府は私たちがマサガナ九計画に従うためにその計画を利用することを望んだ。私たち農民は農業の近代化をやりたいと抵抗している。

それはなぜか。それを分析してみれば、私たちはたくさんある米あるいはトウモロコシを生産することができないということだ。村の銀行は私たちがこの計画に参加できるようにお金を貸す。もし私たちが、農業技術員によつて勧められた化学肥料や農薬を使用しなかったなら、私たちは銀行から借金をすることができない。もし、私たちが、借金した金を銀行に返済できなかったなら、私たちは刑務所行きとなる。マニラの大ホテルは彼らの借金の支払をなぜ延期できるのだろうか。そして彼らはたとえ借金を期限内に支払わなかったとしても、刑務所に送られるとは限らない。どうして、私たち農民だけが刑務所送りにならなければいけないのか。NGA（国立穀物庁）はサマハンナヨン計画の下に含み込まれ

いかなる作物も植えることができないということを知っているのかどうかは私にはわからない。かつて私は二分の一ヘクタールの土地にピーマンを植えた。しかし私は町のマーケットに行つた時、そこでピーマンが供給過剰になっているのを見た。それはすべての農民が緑の革命計画に加入していたからである。これはマーケットにおいてピーマンの価格を下げた。私は家に帰つてからピーマンの残りを海の中へ投げ捨てねばならなかった。

人口のコントロール計画は私たちに二人だけの子供を持つことを強制した。政府のいうことによると、食糧の供給が少ないので、わが国では、あまりに多過ぎる人口は貧困の原因になるという。私は私たちがクリスチャンであることをわが大統領は忘れていてと思う。私たちの宗教では避妊用具を使用することは死に値する罪になる。たくさん近隣の女性は避妊薬の使用による影響で苦しんでいる。わが国の人口はわずか四六六万人である。フィリピンにはまだ多くの土地があり、天然資源は豊富である。

今日、フィリピンにおける主要な問題は富

ている政府機構の一つである。NGAは、収穫期間中で農民が米やトウモロコシの供給余力をほとんど持たない時期に、大変な低価格で米やトウモロコシを買う。私たちは借金に埋れているので、私たちは地主から買おうと思っている土地の代金の支払いをすることができない。土地の価格はその土地の価格による。私たちは十五年間にわたつてサマハンナヨンを通じて土地の代金を支払うことになっている。もし私たちが三年連続してそれを支払わなかったら、そのとき私たちの土地は土地銀行によつて取り上げられ、その土地はサマハンナヨンに提供される。私たちがこの政府の計画を土地改善計画と呼ぶに土地取り上げ計画と呼ぶ理由はこうしたことのためである。

他の計画として、私たちが強制的に加入させられる植樹計画がある。フィリピンのすべての人は五年間、毎月、十本の木を植えることを要求されている。もし、要求された本数の木を植えなかったら、学校を卒業することも、結婚することもできない。わが国では大きな森林はあまり多くない。これは洪水や嵐の原因となる。大資本家や多国籍企業が伐採

の不平等な分配である。クリスチャンとしての私たちは地球と人間は神によつて創造されたと信じている。神は人間が楽しく、幸福に生きるために世界を創造した。土地は神によつて所有されている。人間は平等に創造されたのだから土地はすべての人間のために存在する。神は地球とその天然資源が神の息子や娘たちに平等に分配されるべきことを望んだ。それゆえに、地球上の少数の者があまりにも多くの土地を所有し、多数の人々が土地を所有していないということは大きな罪である。これは神の意志に反している。

都市の労働者の苦しみと搾取は農民の貧困の結果である。売春の問題や少数民族の問題は農民の問題を追跡することによつて発見される。フィリピンに多くの工場があつたとしても、だが、農民が貧しければ、国も貧しいのである。

たぶん、私たちが現在の構造を分析すると、それがより明瞭になるだろう。フィリピンの農民の八十五%中八十%はただの一片の土地すら所有していない。十五%中、約十%だけが小さい土地を所有している。しか

し、仕事をしていない者、あるいは土地を耕していない者、そしてまた、都市に住んでいる者たちがなぜ、そんなにも多くの土地を所有しているのだろうか。また、まったくフィリピン国民でない者やアメリカや日本のような外国からやってきた者たちが、なぜ私たちの大部分の土地を所有しているのだろうか。ところで、私たちは私たちの土地さえも所有しないのに、どうして私たちがフィリピン人であるということが出来るのだろうか。外国人による土地の所有権が停止されないなら、私たちは、私たち自身の国においてスクォッター（不法占拠者）になるだろう。それは、あなた自身の家であるのに、ある日、誰かがあなたの家に入り込んで来て、その人がその家を所有するためにそこからあなたを追い出すようなものである。アメリカのドールとデルモンテはパインナップルの土地として約一万五千ヘクタールを所有している。これらの二つの多国籍企業は農民からこれらの土地を強奪した。ダバオデルノルテの農民は大民族資本家と日本の多国籍企業によって約三万ヘクタールの土地が取り上げられた。これらの農民は二種類の抑圧を受けている。彼らは自分の土地から追い出され、カンパニーズと呼

ばれる日雇労働者になった。また、彼らは都市に行き、仕事を見つけようとしたが、仕事を見つめることができなかった。

フィリピンにはたくさん森と鉱山がある。しかしこれらのほとんどはアメリカと日本の多国籍企業によってすでに取られてしまっている。わがフィリピンの森林はまだたくさんあり、わが国を木材輸出センターの一つにしている。だが、農民は一本の木さえも切ることができない。私たちは逮捕される。だが、大資本家と多国籍企業は毎年、一つの州で一万七千本の木を切ることが許されている。だが、彼らはまったく逮捕されない。それから私たちはたくさん森の森林地帯で、木がほんの少ししか生えていないために洪水に悩まされている。洪水に悩まされる人々はお金持ちの民族資本家や多国籍企業であるのなら良いのだが、それは私たち貧しい人々である。田圃は洗い流され、小さな私たちの家は破壊される。また浸水期間中に多くの人々は病気になる。

私たちは公害に苦しんでいる。多くの川や海は国内外の資本家によって作られた工場に

よってすでに汚染されている。海の魚はだんだん少なくなってきた。魚は日本の大型トロール船を含む漁業権を所有する資本家によって取られる。資本家と多国籍企業がほとんど魚を取っていくなら、漁民は魚を取れなくなってしまうだろう。

私たちは農民はたくさん生産物、米、トウモロコシ、バナナ、パインナップル、マンゴ、香料等を生産している。私たちが資本家にこれらを持っていくときは、彼らが大変安い値段で売る。これが私たちの貧困の原因である。だから、私たちの貧困の責任はアメリカや日本の多国籍企業、官僚資本家、民族資本家にあることは明らかである。現在の体制は彼らによって管理されている。彼らは私たちの真の敵である。彼らは私たちに対して大変残酷である。彼らは彼ら自身の利益を守るためには、あらゆることを、私たちを殺すことさえするだろう。資本主義は罪悪である。資本家は私たちを奴隷にさせる。これはたとえ、私たちがマルコスを倒しても、体制が資本主義的であり続けるなら、私たちは勝利を手にするのではないという理由である。私たちは資本主義体制を変えなければならない。

さて、私たちの現在の文化、イデオロギーについて見てみよう。教育制度は資本家によってコントロールされている。それは多国籍企業にのみ奉仕するものである。学校は青年に彼らの両親や仲間の農民を助けるために農村に帰ることを教えるかわりに、多国籍企業の所有する大会社の従業員や管理者になるように奨励している。その後、これらの会社の管理者になった者たちは農民のところに行つて、多国籍企業に土地を売つたら、農民の利益になるだろうという甘言を振りまくようになる。これらの教育を受けた者たちが農民を欺くだけであるために私たちの困難な状況をいつそう悪化させている。現在の教育制度の下で、それが、大変西洋化されているために、フィリピン人としてのアイデンティティを私たちは失っている。教育を受けた者はフィリピン同胞の苦しみを忘れていく。そして彼らはかわりに、外国で生活することを好んでいる。私たちは私たち自身の文化を理解しないが、外国の文化を理解する。学校は若者に英語の読み書きを教えている。貧しい農民の子供たちは学校に行けないか三年行くだけでやめなければならないので、英語を学ぶことが

できない。このことはフィリピンにおいては英語を話したり書いたりできないなら、人間として認められないことを意味する。私たちは無学で無知な者と考えられ、誰も私たちに注意を払おうとはしない。これは私たちにとても痛々しいことである。

現在の私たちの社会においては、おびただしいプロパガンダが爆撃されている。だが、貧しい人々のプロパガンダを聞くことはできない。多国籍企業の宣伝だけを聞くことができる。彼らの宣伝はたいへん上手であり、彼らの商品を買うように説き伏せられる。チュバ（天然のココナッツワイン）を買うかわりに、コーラを買う。資本家たちはもし、タンジュアラム酒を飲まないなら、人間じゃないと宣伝している。それゆえに、もしチュバだけを飲んでいく人は人間でなくなる。多国籍企業の宣伝は彼らの商品を使うことで、人びとを幸福にしてくれる。また、彼らは私たちに、アメリカや日本の多国籍企業によって生産された化学製品、殺虫剤、化学肥料と農薬を使用するように宣伝する。これらの商品は大変高い。私たちはこれらの商品を一度使

やめることができなくなってしまう。私たちはこれらの商品がどんなに高い値段になつても、これらの商品を買うことを強制される。これは私たちの借金と貧困をいつそう悪化させる。これらの化学製品は私たちの土地と海を破壊している。

映画やテレビ、そして他のステージの提供は、大きいビルディングや美しい自動車やホテル、そして高い橋などのある都会に私たちがやってくるように招いている。彼らがどんなに貧しいかは問題ではない。農民たちは村を去って都会に行きたい気持ちにさせられる。彼らは都市に行くためのお金を稼ぐために農場で一生懸命に働くだろう。あるいは彼らは都市で生活できるように、そこで働くだろう。農民の多くの娘たちはこのようにして売春婦になつていく。彼女たちは都市に出かけ学校に行つて勉強する時だけ、人間として扱われるのでそうする。しかし、貧困のために学校の授業料を支払う余裕がない。それで彼女たちはコールガールになることを強制される。

マスメディアは農民の真の状況や他の社会の分野についても真実を描いていない。私は



フィリピンには外国に輸出できる米の余剰があるというラジオ報道をきいた。しかし、農民の家にいったら、彼らは米を食べないで蒸したバナナを食べているのを見るだろう。

医療制度もまた西洋化されている。私たちの村に、薬草や針についてよく知っている老人たちがいる。私たちの多くは彼らの所に行く。そして私たちは良くなる。しかし、資本家の宣伝は、人々を殺すかも知れない旧式の医学を使うやぶ医者として彼らのことを攻撃する。だが、西洋の教育を受けた医者が処方する薬は高く、おびただしい副作用がある。それはそれゆえに、私たちの身体に対して危険なものである。

現在の文化とイデオロギーは私たちに開発について教えている。その開発とは私たちの所有でない巨大なビルディングの開発であり、空気を汚染する多くの工場であり、数千人の農民を追い出す広大なプランテーションであり、漁民から魚を奪っていく大型トロール船のことである。

これは開発といえるのだろうか。  
いや、私はこれを自然の破壊であるといいたい。

### 編集後記

今月は、活字ばかりになりました。

「フィリピン活動家のみた日本の現状」は、今年はじめ二カ月間、日本をまわった交流の旅の総括の一部です。「フィリピン農民の生活」は、そのときはなしたことのまとめです。来月号は、6号の特集をうけて、全冊をつかって印刷マニュアルにするつもりです。ピラ、機関紙(誌)をつくるときに活用してください。

韓国の状況は、予想以上のスピードです。九月から十月にかけて、軍事独裁に反対し、その犠牲者を救出する運動もありあがりが必要です。

9月30日、韓国人政治犯家族・番朋の会、日音協、水牛の主催で「クナリオンダー」その日がくる」と題した集会をひらきます。豊島公会堂で6時から。こんどだしたレコードにおさめられた政治犯の歌が中心になります。また、光州決起の報告劇を中心に、詩や音楽で構成する支援集会もいくつか準備中です。水牛楽団は、活動を再開しました。あたらしいスタイルをさぐりながら、レパートリーをそろえているところです。報告はいずれ。

### 購読の御案内

\*本誌は書店にはおきません。毎号確実に入手されるためには編集部あて予約購読の申し込みをしてください。発刊と同時に直送します。

\*申し込みと送金は郵便振替(口座名 水牛編集委員会、口座番号東京四一九一七九二)または現金書留でお願いします。住所、氏名、電話番号、何号からということをお知らせください。

\*購読料は送料とも一年分三〇〇〇円、半年分一八〇〇円です。

### 水牛通信

第二巻第九号

一九八〇年九月十日発行

定価 二〇〇円

発行人 堀田正彦

発行所 水牛編集委員会

〒154東京都世田谷区新町2-15-3

八巻方

電話〇三(四二五)九六五八

振替口座東京四一九一七九二

印刷所 (株)トライプリントショップ